

## 自己受容性の研究（3）

— TST 記述にあらわれた自己態度との関わりについて —

板 津 裕 己

### 問 題

自己受容性 (self-acceptance) は、単に現在の自分自身に満足することではなく、積極的に生きることや自己成長の意欲の基盤をなし、不思議の対立観念をいれず、自己経験を拒否・抑圧することなくありのままに受け入れることである。そして、このような意味から自己受容は知的評価とは異なるものと考えられている (Combs, A. W. & Snygg, D., 1949, 国分, 1979)。すなわち、この概念は、自己を肯定にとらえることではなく、自分自身を肯定や否定を超えてありのままに受け入れる「器」の大きさ・こころの広さをあらわすものである。このような自己受容の特性について、これまでの研究から、これが気持ちの安定感や低不安傾向をもたらす (Pulisuk, M., 1963, Ohnmacht, F. W. & Muro, J. J., 1967, 柳井, 1969), 現実場面への適応性 (LaFon, F. E., 1954), 行為・行動への積極性と自主性, および責任性をともなう (Lambardo, J. P., et al., 1975) ことなどがあきらかにされている。Kropfer, B., ほか (1954) の自己受容仮説は、内的安定性や価値体系などを含めており、これらを整理したものと考えてよからう。

この自己受容性に隣接する概念の1つに自己態度 (self-attitude) がある。そして、古沢・星野 (1962) は、この自己態度を“個人が認知し感じ評価する自己の所有, 属性のすべてをさしている”と定義している。すなわち、社会的存

在としての自分自身のあらゆる側面の認知や評価を通じた自分自身への構えと  
言うことができよう。このように、自己態度は、自己の感情的側面さらに認知的  
側面への評価態度をあらわすという点で自己受容性とはややおもむきを異に  
するところがある。

自己態度をとらえる測定法の一つに、Bugental, J. F. T. & Zelen, S. L.,  
(1950) が考案し、Kuhn, M. H. & Mcpartland, T. S., (1954) によって今日の  
体裁をとるようになった、“Who am I?” test (WAI, あるいは、Who are  
you test, WAY, Twenty sentences test, TST,以下本稿ではTSTと記す) があ  
る。これは、「私は誰か」という自分自身への問いかけをすることによって、  
「いまここにある自己」をあきらかにしようとするものである。TSTが、自己  
への問いかけを目的とするものであって、他者への自己紹介を意図していない  
ことは、このテストをわが国に紹介した文献の1つである古沢と星野が用いた  
回答用紙の注意書きからもあきらかである。

このTSTによる自己への問いかけは、普段あまり考えたことがない、さら  
に、あたりまえだと思っている「自己」をあらためて見つめ直すことで、あま  
り自分自身を大事にとらえていなかったことを再認識したり、場合によっては  
自己の不確かさや無力さから不安感を引き起こすかもしれない。それゆえに、  
各人の自己の確立状況いかんによっては困難な作業になるかもしれない。そし  
て、このような心理負荷から、自己を確立していない、安定した自己にない人  
は、例えば、①記述数が少なくなる、極端な場合は記述放棄もあろう、②ごく  
ありきたりの外面的な記述に終始して自己の内面に迫った記述をしない、逆  
に、自己確立している人、自己受容している人は、自分自身の肯定的な面、否  
定的な面を問わずに比較的容易に自分自身についての記述ができるのではない  
だろうか。これらから、自己への問いかけに対する答え、すなわち記述内容  
が、実存的存在としての自己の確立度の指標となり得るのではないかという仮  
説がたてられよう。

本研究は、自己受容している人、自己受容していない人の自分自身に対する  
問いかけとその記述内容を分析することにより、それぞれの特徴を見いだすこ

と、さらに上記のような傾向があるかどうかを検証することを目的とするものである。

## 研究

### 研究目的

「私は誰か」の問いかけに対して記述された自己（自己像）と自己受容性との関係について明らかにする。さらに、問題の項で提起した仮説についての検証もおこなう。

### 研究方法

#### 1. 被験者

男性大学生196名。調査は集団形式にて実施した。

#### 2. 尺度

自己態度の測定には、TST (Bugental, J. E. T., et al.,1950, 古沢・星野, 1962) を用いた。記述用紙は古沢・星野のものによった。また、自己受容性指標には、自己受容尺度短縮版（以下 SASSV と略す, 板津, 1989）を使用した。調査は、TST, SASSV の順に実施した。

#### 3. 分類方法

SASSVは、基調特性（上位因子スコア, 5群）、尺度合計点・PB値各3分類と尺度合計点×PB値の9群（9群別総合評価）、および4群別総合評価各指標を観点とする。各指標の分類基準については板津（1989）および資料を参照のこと。

TSTの分類法には、第1の分類として高垣（1974）を一部簡略にしたものを、第2の分類には山田（1981）のものを用いた。各系列分類項目を以下に示し、以後、本文およびTableでは分類コードにて略記する。

#### 第1分類：記述内容カテゴリー分類

1. 社会的係留（a.性別, b.学校・学年など, c.年齢・生年月日, d.出身地・現住所, e.出生順位・家族構成, f.民族・国籍など, g.特定集団への所属, h.氏名, i.その他）

2. 準合意的記述 (a. 生物など上位概念規定, b. 形而上的・宗教的定義規定など)
3. 単なる普遍的事実。
4. 自己叙述的記述。
  - 41 身体的側面 (a. 健康・体質, b. 容姿・体格, c. 運動能力・動作)
  - 42 心情的側面 (a. 才能・能力, b. 気質・性格, c. 対人態度, d. 関心・趣味, e. 願望・欲求, f. 主義・意見, g. その他)
  - 43 対人關係的側面 (a. 家族, b. 友人 (含む異性), c. 対社会)
  - 44 生活的側面 (a. 生活習慣・生活事実, b. 生活態度・生活感情)
  - 45 時間的側面 (a. 過去の事実・態度, b. 未来の事実・態度)
5. 4. に分類されない全体的な自己規定。類比的自己規定を含む。
6. 自己に対する感情 (a. 對自己感情, 評価, b. 對自己願望, c. 「私は誰だかわからない」に類する記述, d. 「私は私」に類する記述。)
7. 記述時状態の記述。
8. その他。

#### 第2分類：態度分析カテゴリー

1. 自己特性に対する態度的評価 (a. 肯定, b. 中立, c. 否定)
2. 環境的事物・事象への評価的態度 (a. 接近, b. 形式的, c. 拒否・回避)
3. 自己と他者との関わりや態度 (a. 接近, b. 形式的, c. 拒否・回避)

以下1.2.3.を認知対象と記す。また、肯定(接近)的および否定(拒否・回避)的記述は、積極的な意志・感情表現が含まれているものとし、それ以外は中性・形式的態度と見なす。

## 結 果

### 1. 自己受容性と TST 記述数

SASSV 各指標ごとの TST 平均記述数を Table 1 に示す。5 指標のいずれにおいても群間に平均記述数に差が認められなかった (基調特性:  $F = 0.53$ ,  $df = 2, 193$ , n.s., 尺度合計点:  $F = 1.07$ ,  $df = 2, 193$ , n.s., P B Q:  $F =$

1.88,  $df=2,193$ , n.s., 9 群別総合評価:  $F=1.58$ ,  $df=2,193$ , n.s., 4 群別総合評価:  $F=0.90$ ,  $df=2,193$ , n.s.)。

なお, 5 指標ともに各群の分散は同質でなかったが, Norton の研究 (Lindquist, E. F., 1953) ほかを参考にそのまま分散分析処理をおこなった。

Table1 TST 平均記述数

|         | 平均    | S.D. |          | 平均    | S.D. |
|---------|-------|------|----------|-------|------|
| 基調特性    |       |      | 9 群別総合評価 |       |      |
| A群      | 19.00 | 2.14 | 1 群      | 19.52 | 1.44 |
| B群      | 19.49 | 1.43 | 2 群      | 19.45 | 1.32 |
| C群      | 19.29 | 1.65 | 3 群      | 18.60 | 2.58 |
| D群      | 19.47 | 1.58 | 4 群      | 18.79 | 2.44 |
| E群      | 19.49 | 1.64 | 5 群      | 19.30 | 1.41 |
| 尺度合計点   |       |      | 6 群      | 20.00 | 0.00 |
| 上位群     | 19.35 | 1.69 | 7 群      | 20.00 | 0.00 |
| 中位群     | 19.23 | 1.85 | 8 群      | 20.00 | 0.00 |
| 下位群     | 19.67 | 1.28 | 9 群      | 19.48 | 1.56 |
| P B Q   |       |      | 4 群別総合評価 |       |      |
| バランス群   | 19.17 | 2.04 | I 群      | 19.52 | 1.44 |
| 中位群     | 19.43 | 1.31 | II 群     | 19.17 | 1.88 |
| アンバランス群 | 19.52 | 1.58 | III 群    | 19.23 | 1.85 |
|         |       |      | IV 群     | 19.67 | 1.28 |

## 2. 自己受容性と自己態度記述内容

SASSV 各指標ごとの記述内容カテゴリー出現率は Table 2～6 の通りであった。ここでは, 5 指標のいずれにおいても群間の 8 カテゴリー出現率に差が認められなかった (基調特性:  $\chi^2=15.64$ ,  $df=28$ , n.s., 尺度合計点:  $\chi^2=11.30$ ,  $df=14$ , n.s., P B Q:  $\chi^2=3.46$ ,  $df=14$ , n.s., 9 群別総合評価:  $\chi^2=40.82$ ,  $df=56$ , n.s., 4 群別総合評価:  $\chi^2=13.15$ ,  $df=21$ , n.s.)。

このような傾向は, 全記述の過半数を占める4.の細カテゴリー (41～45) にもみられる。すなわち, 5 指標のすべてで4.細カテゴリー出現率 (全体比) に差が認められなかった (基調特性:  $\chi^2=4.78$ ,  $df=28$ , n.s., 尺度合計点:  $\chi^2=1.29$ ,  $df=14$ , n.s., P B Q:  $\chi^2=0.52$ ,  $df=14$ , n.s., 9 群別総合評価:  $\chi^2=25.50$ ,  $df=56$ , n.s., 4 群別総合評価:  $\chi^2=2.43$ ,  $df=21$ , n.s.)。

Table 2 基調特性スコア5群別自己態度記述内容

|     | n  | 1    | 2   | 3   | 4    | (41 | 42   | 43  | 44   | 45) | 5   | 6    | 7   | 8   |
|-----|----|------|-----|-----|------|-----|------|-----|------|-----|-----|------|-----|-----|
| A 群 | 31 | 28.2 | 5.1 | 1.5 | 49.7 | 5.3 | 30.1 | 1.5 | 9.5  | 2.9 | 1.9 | 10.2 | 2.9 | 0.1 |
| B 群 | 39 | 26.1 | 3.4 | 1.1 | 55.0 | 4.2 | 35.3 | 1.6 | 10.4 | 3.6 | 3.4 | 9.6  | 1.1 | 0.0 |
| C 群 | 38 | 22.4 | 6.3 | 2.6 | 51.2 | 3.8 | 32.3 | 0.1 | 9.8  | 4.3 | 4.1 | 11.6 | 1.9 | 0.0 |
| D 群 | 43 | 25.0 | 3.7 | 0.1 | 53.8 | 2.6 | 38.1 | 1.8 | 8.6  | 2.6 | 2.4 | 13.3 | 0.1 | 0.0 |
| E 群 | 45 | 18.1 | 4.9 | 3.4 | 54.4 | 5.6 | 36.1 | 1.9 | 8.6  | 2.2 | 3.6 | 14.7 | 0.1 | 0.0 |

横/分類コード、数値は出現率。(41~45)は4の細分類カテゴリー出現率(以下のTableも同様)。

Table 3 尺度合計点3群別自己態度記述内容

|      | n  | 1    | 2   | 3   | 4    | (41 | 42   | 43  | 44  | 45) | 5   | 6    | 7   | 8   |
|------|----|------|-----|-----|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 高得点群 | 55 | 23.2 | 4.3 | 1.0 | 56.6 | 3.3 | 39.4 | 1.9 | 9.3 | 2.7 | 2.5 | 11.2 | 0.1 | 0.0 |
| 中位群  | 93 | 25.4 | 4.4 | 2.1 | 50.0 | 4.4 | 30.9 | 1.6 | 9.8 | 3.2 | 3.2 | 12.6 | 2.0 | 0.3 |
| 低得点群 | 48 | 10.6 | 5.4 | 2.4 | 55.3 | 5.1 | 36.5 | 1.2 | 8.9 | 3.6 | 3.7 | 12.0 | 0.1 | 0.0 |

横/分類コード、数値は出現率。

Table 4 P B Q 3群別自己態度記述内容

|         | n  | 1    | 2   | 3   | 4    | (41 | 42   | 43  | 44   | 45) | 5   | 6    | 7   | 8   |
|---------|----|------|-----|-----|------|-----|------|-----|------|-----|-----|------|-----|-----|
| バランス群   | 69 | 28.6 | 4.7 | 2.0 | 47.7 | 3.6 | 31.6 | 1.2 | 8.7  | 2.6 | 3.7 | 11.7 | 1.2 | 0.0 |
| 中位群     | 65 | 20.9 | 4.4 | 1.3 | 57.2 | 4.1 | 36.5 | 2.2 | 10.7 | 3.6 | 2.4 | 12.4 | 1.3 | 0.0 |
| アンバランス群 | 62 | 20.7 | 4.9 | 2.5 | 54.8 | 5.0 | 35.7 | 1.2 | 9.8  | 3.1 | 3.3 | 12.1 | 1.7 | 0.0 |

横/分類コード、数値は出現率。

### 3. 自己受容性と自己態度分析

SASSV各指標ごとの自己態度(認知対象および肯定・接近—中性—否定・回避的かかわり方,以下単にかかわり方と記す)カテゴリー出現率はTable 7~11の通りであった。ここでは,認知対象についてはいずれの指標においても3対象の出現率に差が認められなかった(基調特性: $\chi^2=6.14$ ,  $df=8$ , n.s., 尺度合計点: $\chi^2=1.75$ ,  $df=4$ , n.s., P B Q: $\chi^2=1.47$ ,  $df=4$ , n.s., 9群別総合評価: $\chi^2=11.78$ ,  $df=16$ , n.s., 4群別総合評価: $\chi^2=2.99$ ,  $df=6$ , n.s.)のに対し,対象へのかかわりでは,P B Qをのぞく4指標で3態度出現率に差が認められた(基調特性: $\chi^2=26.41$ ,  $df=8$ ,  $p<0.001$ , 尺度合計点: $\chi^2=18.27$ ,  $df=4$ ,  $p<0.01$ , P B Q: $\chi^2=7.59$ ,  $df=4$ , n.s., 9群別総合評価: $\chi^2=60.89$ ,  $df=16$ ,  $p<0.001$ , 4群別総合評

Table 5 総合評価 9 群別自己態度記述内容

|     | n  | 1    | 2   | 3   | 4    | (41 | 42   | 43  | 44   | 45) | 5   | 6    | 7   | 8   |
|-----|----|------|-----|-----|------|-----|------|-----|------|-----|-----|------|-----|-----|
| 1 群 | 23 | 27.6 | 3.6 | 1.3 | 51.7 | 4.0 | 36.1 | 1.3 | 8.2  | 3.1 | 3.3 | 11.6 | 0.9 | 0.0 |
| 2 群 | 20 | 22.6 | 4.1 | 1.0 | 56.3 | 2.3 | 39.6 | 3.1 | 8.2  | 3.1 | 2.1 | 13.1 | 0.0 | 0.5 |
| 3 群 | 10 | 17.2 | 5.9 | 0.0 | 66.1 | 4.8 | 50.5 | 0.1 | 8.6  | 1.6 | 2.2 | 7.0  | 1.6 | 0.0 |
| 4 群 | 38 | 31.4 | 5.5 | 2.2 | 41.7 | 3.9 | 26.9 | 1.0 | 8.3  | 1.7 | 4.6 | 12.3 | 1.7 | 0.6 |
| 5 群 | 37 | 21.4 | 4.3 | 1.4 | 56.3 | 4.1 | 33.5 | 2.0 | 13.0 | 3.8 | 2.1 | 12.0 | 1.8 | 0.3 |
| 6 群 | 21 | 20.7 | 2.9 | 3.3 | 54.5 | 6.4 | 31.2 | 1.7 | 10.7 | 4.5 | 2.1 | 13.8 | 2.6 | 0.0 |
| 7 群 | 8  | 19.4 | 4.4 | 3.1 | 63.1 | 9.4 | 40.6 | 1.9 | 6.3  | 8.0 | 0.6 | 9.4  | 0.0 | 0.0 |
| 8 群 | 8  | 16.3 | 5.0 | 0.0 | 60.6 | 8.8 | 40.0 | 1.3 | 5.6  | 5.0 | 4.4 | 12.5 | 1.3 | 0.0 |
| 9 群 | 31 | 21.9 | 6.0 | 2.6 | 51.5 | 4.1 | 34.4 | 1.0 | 9.6  | 2.3 | 4.5 | 12.4 | 1.0 | 0.2 |

横／分類コード、数値は出現率。

Table 6 総合評価 4 群別自己態度記述内容

|       | n  | 1    | 2   | 3   | 4    | (41 | 42   | 43  | 44  | 45) | 5   | 6    | 7   | 8   |
|-------|----|------|-----|-----|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| I 群   | 23 | 27.6 | 3.6 | 1.3 | 51.7 | 4.0 | 36.1 | 1.3 | 8.2 | 3.1 | 3.3 | 11.6 | 0.9 | 0.0 |
| II 群  | 30 | 20.7 | 4.7 | 0.7 | 59.8 | 3.1 | 43.3 | 2.3 | 8.3 | 2.6 | 2.1 | 11.0 | 0.7 | 0.3 |
| III 群 | 93 | 25.4 | 4.4 | 2.1 | 50.0 | 4.4 | 30.9 | 1.6 | 9.8 | 3.2 | 3.2 | 12.6 | 2.0 | 0.3 |
| IV 群  | 48 | 10.6 | 5.4 | 2.4 | 55.3 | 5.1 | 36.5 | 1.2 | 8.9 | 3.6 | 3.7 | 12.0 | 0.1 | 0.1 |

横／分類コード、数値は出現率。

価： $\chi^2 = 25.00$ ,  $df = 6$ ,  $p < 0.001$ 。

認知対象ごとのかかわり方では、対象1.においてPBQをのぞく4指標で3態度の出現率に差が認められた（基調特性： $\chi^2 = 24.54$ ,  $df = 8$ ,  $p < 0.01$ , 尺度合計点： $\chi^2 = 19.98$ ,  $df = 4$ ,  $p < 0.001$ , PBQ： $\chi^2 = 7.59$ ,  $df = 4$ , n.s., 9群別総合評価： $\chi^2 = 57.45$ ,  $df = 16$ ,  $p < 0.001$ , 4群別総合評価： $\chi^2 = 26.72$ ,  $df = 6$ ,  $p < 0.001$ ）。また、対象2., 対象3.では5指標ともにそれぞれの出現率に差が認められなかった（対象2., 基調特性： $\chi^2 = 2.63$ ,  $df = 8$ , n.s., 尺度合計点： $\chi^2 = 0.39$ ,  $df = 4$ , n.s., PBQ： $\chi^2 = 1.78$ ,  $df = 4$ , n.s. 9群別総合評価： $\chi^2 = 14.26$ ,  $df = 16$ , n.s., 4群別総合評価： $\chi^2 = 1.13$ ,  $df = 6$ , n.s., 対象3., 基調特性： $\chi^2 = 3.08$ ,  $df = 8$ , n.s., 尺度合計点： $\chi^2 = 1.48$ ,  $df = 4$ , n.s., PBQ： $\chi^2 = 1.04$ ,  $df = 4$ , n.s., 9群別総合評価： $\chi^2 = 13.24$ ,  $df = 16$ , n.s., 4群別総合評価： $\chi^2 = 3.27$ ,  $df = 6$ , n.s.）。

認知対象へのかかわり方（全体）において差が認められたのは、もっぱら対

Table 7 基調特性スコア 5 群別自己態度分析

|    | Σ1   | 1a  | 1b   | 1c   | Σ2   | 2a   | 2b   | 2c  | Σ3   | 3a  | 3b  | 3c  | Σa   | Σb   | Σc   |
|----|------|-----|------|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-----|------|------|------|
| A群 | 53.1 | 7.5 | 35.1 | 10.5 | 39.0 | 15.1 | 20.4 | 3.6 | 7.8  | 2.4 | 4.6 | 0.8 | 25.0 | 60.1 | 14.9 |
| B群 | 56.6 | 8.2 | 33.7 | 14.7 | 33.6 | 12.6 | 19.2 | 1.7 | 9.9  | 2.6 | 6.6 | 0.7 | 23.4 | 59.5 | 17.1 |
| C群 | 48.0 | 6.0 | 32.7 | 22.0 | 32.3 | 8.5  | 20.6 | 3.3 | 7.0  | 1.5 | 3.5 | 1.9 | 16.0 | 56.9 | 27.1 |
| D群 | 57.3 | 5.2 | 30.0 | 12.2 | 31.1 | 13.1 | 16.0 | 1.9 | 11.6 | 4.1 | 6.7 | 0.8 | 32.4 | 52.7 | 14.9 |
| E群 | 66.4 | 4.3 | 29.4 | 32.6 | 26.5 | 9.2  | 15.2 | 2.1 | 7.2  | 2.1 | 3.3 | 1.8 | 15.6 | 47.9 | 36.5 |

横／分類コード、数値は出現率。各群のn数はTable 6を参照のこと。

Table 8 尺度合計点 3 群別自己態度分析

|     | Σ1   | 1a   | 1b   | 1c   | Σ2   | 2a   | 2b   | 2c  | Σ3   | 3a  | 3b  | 3c  | Σa   | Σb   | Σc   |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-----|------|------|------|
| 上位群 | 56.9 | 15.2 | 30.5 | 11.2 | 31.7 | 12.9 | 16.7 | 2.1 | 11.5 | 4.3 | 6.3 | 0.8 | 32.4 | 53.5 | 13.8 |
| 中位群 | 59.3 | 6.6  | 35.4 | 17.3 | 33.1 | 11.5 | 19.1 | 2.6 | 7.6  | 1.7 | 5.1 | 0.8 | 19.7 | 59.6 | 20.7 |
| 下位群 | 62.7 | 3.7  | 27.5 | 31.5 | 30.2 | 10.2 | 17.7 | 2.3 | 7.1  | 2.2 | 3.1 | 1.8 | 16.1 | 48.3 | 35.6 |

横／分類コード、数値は出現率。各群のn数はTable 7を参照のこと。

Table 9 P B Q 3 群別自己態度分析

|         | Σ1   | 1a   | 1b   | 1c   | Σ2   | 2a   | 2b   | 2c  | Σ3  | 3a  | 3b  | 3c  | Σa   | Σb   | Σc   |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|
| バランス群   | 59.7 | 11.3 | 35.7 | 12.8 | 30.9 | 8.7  | 20.1 | 2.1 | 9.4 | 3.3 | 5.1 | 1.1 | 23.2 | 60.8 | 15.9 |
| 中位群     | 56.8 | 7.8  | 30.7 | 18.2 | 33.5 | 14.5 | 16.5 | 2.5 | 9.7 | 2.9 | 5.9 | 1.0 | 25.2 | 50.0 | 21.7 |
| アンバランス群 | 61.9 | 5.5  | 29.5 | 26.9 | 31.6 | 11.4 | 17.6 | 2.6 | 5.8 | 1.4 | 3.5 | 1.7 | 18.3 | 50.6 | 31.2 |

横／分類コード、数値は出現率。各群のn数はTable 8を参照のこと。

象1.でのそれによっている。対象2.や3.において各指標とも群間の出現率に差が認められなかった理由として、対象2.では総じて接近・肯定的記述が多くなることが考えられる。ここに含まれる記述内容はものごとへの関心や好き嫌いに関するものであり、1.や3.でのそれよりも接近・肯定的記述が容易なためと思われる。また、対象3.についてはいずれも出現率が小さいことがあげられよう。

各指標を通して、下位群（望ましくない・心理的にあまり健康でない群）は中性的記述から自己否定的な記述に終始するのに対して、上位群（より望ましい・心理的に健康と思われる群）では、自己肯定的記述が多くなるとともに、自己否定的な記述も肯定的記述の出現率ほどではないがいくらか多めである。す



Table10 総合評価9群別自己態度分析

|    | Σ1   | 1a   | 1b   | 1c   | Σ2   | 2a   | 2b   | 2c  | Σ3   | 3a  | 3b  | 3c  | Σa   | Σb   | Σc   |
|----|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-----|------|------|------|
| 1群 | 55.2 | 17.4 | 27.2 | 10.7 | 31.8 | 12.5 | 17.6 | 1.8 | 12.9 | 4.9 | 6.7 | 1.3 | 34.7 | 51.4 | 13.8 |
| 2群 | 55.0 | 14.1 | 29.6 | 11.3 | 32.4 | 13.4 | 17.0 | 2.1 | 12.6 | 5.1 | 7.2 | 0.0 | 32.6 | 53.7 | 13.6 |
| 3群 | 61.3 | 13.4 | 34.4 | 13.4 | 31.7 | 15.1 | 13.4 | 3.2 | 7.0  | 0.8 | 2.1 | 0.5 | 30.1 | 52.1 | 17.7 |
| 4群 | 62.2 | 8.8  | 40.5 | 12.9 | 31.1 | 7.0  | 22.1 | 2.0 | 6.7  | 2.1 | 3.9 | 0.7 | 17.9 | 66.5 | 15.5 |
| 5群 | 55.6 | 5.6  | 32.9 | 17.1 | 35.7 | 14.7 | 18.2 | 2.8 | 8.7  | 1.4 | 6.2 | 1.1 | 21.7 | 57.3 | 21.0 |
| 6群 | 58.6 | 5.5  | 29.5 | 23.6 | 30.5 | 11.0 | 16.7 | 2.9 | 11.0 | 1.4 | 4.8 | 4.8 | 17.9 | 51.0 | 31.2 |
| 7群 | 61.9 | 6.9  | 33.8 | 21.3 | 26.9 | 5.6  | 17.5 | 3.8 | 11.3 | 3.8 | 5.6 | 1.9 | 16.3 | 5.69 | 26.9 |
| 8群 | 65.6 | 5.0  | 27.5 | 33.1 | 23.8 | 12.5 | 8.8  | 2.5 | 10.6 | 4.4 | 4.4 | 1.9 | 21.9 | 40.6 | 37.5 |
| 9群 | 60.3 | 2.6  | 25.3 | 3.3  | 34.6 | 10.6 | 19.0 | 5.0 | 5.1  | 1.3 | 2.0 | 1.8 | 14.6 | 46.4 | 39.1 |

横／分類コード、数値は出現率。各群のn数はTable 9を参照のこと。

Table11 総合評価4群別自己態度分析

|      | Σ1   | 1a   | 1b   | 1c   | Σ2   | 2a   | 2b   | 2c  | Σ3   | 3a  | 3b  | 3c  | Σa   | Σb   | Σc   |
|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-----|------|------|------|
| I群   | 55.2 | 17.4 | 27.2 | 10.7 | 31.8 | 12.5 | 17.6 | 1.8 | 12.9 | 4.9 | 6.7 | 1.3 | 34.7 | 51.4 | 13.8 |
| II群  | 57.9 | 14.3 | 40.1 | 15.8 | 31.3 | 13.9 | 15.0 | 2.4 | 10.8 | 4.0 | 6.3 | 0.1 | 32.2 | 52.5 | 15.3 |
| III群 | 59.3 | 6.6  | 35.4 | 17.3 | 33.1 | 11.5 | 19.1 | 2.6 | 7.6  | 1.7 | 5.1 | 0.8 | 19.7 | 59.6 | 20.7 |
| IV群  | 62.7 | 3.7  | 27.5 | 31.5 | 30.2 | 10.2 | 17.7 | 2.3 | 7.1  | 2.2 | 3.1 | 1.8 | 16.1 | 48.3 | 35.6 |

横／分類コード、数値は出現率。各群のn数はTable 10を参照のこと。

なわち、下位群ほど一方づいた記述傾向はみられなかった。

4群別総合評価では、全体での対象へのかかわり方の出現率、および、対象1.でのそれで群間に差が確認されただけでなく、上位群になるにつれて自己肯定的記述の出現率が増大する。逆に、下位群になるにつれて自己否定的な記述の出現率が増大していくこと、さらに、これが一様な傾向をとることがみいだされた。

## 考 察

TSTの「私は誰か」の問いかけは、単に自己紹介にとどまるものでなく、自分自身への問いかけである。それゆえに、心理的に健康であるといわれる自己受容的な人は、社会的属性など自分自身の外面的な領域（本論での分類では、第1分類：記述内容カテゴリーの1.～3.および41.などがこれに相当しよう）にとどまることなく、自己の内面性を豊かに表現できるどうかに違いがあらわれるのではないかと考えた。

しかしながら、本研究では、自己受容性の程度によってカテゴリー分類された記述内容におおきな違いが認められなかった。すなわち、自己受容していない人は、社会的属性など外面的な記述が中心になる、逆に、自己受容している人は、より内面的な記述が中心となるというような傾向は認められない。また、低自己受容群の記述数があきらかに少なくなることもみいだされなかった。

本研究の仮説は、外面的記述（社会的属性・社会的係留）と内面的な記述（自己叙述的記述）では、後者の方がより心理的負荷が大であるという高垣の見解によるものである。これに対して、Kuhnほかは、人がある状態に反応する際に何に準拠するかがTSTの記述内容に反映されると考え、記述者が自己の社会的役割をよりどころとして行動するならば、社会的属性に関する記述が出現しやすいという見解をとっている。このことについて、彼らの指摘に本質的な矛盾はないと高垣自身が述べている。これらの相違は、彼らの興味関心がいくらか異なることから生じたものであろう。本研究で得られた結果では、明確な差こそみられなかったが、上位群の方がいくらか各カテゴリーに分散し、社会的係留（記述内容カテゴリー）や対象3.（態度分析）の出現率がやや多くなる傾向にあることから、彼らの見解の中庸からKuhn側にすこし寄った位置にあるものと思われる。

自己受容性は心理的健康をあらわす指標の1つ（例えば、Jahoda, M., 1958）であり、心理療法ではtherapeutic-goal (Crowne, D. P. & Stephenson, M. W., 1961), あるいは、パーソナリティ変容のきっかけと考えられている。ここでみいだされたように、自己受容することによって、自己・自己概念の本質が

根本的に変化するのではなく、むしろ、自己の枠組みはおおきく変化しない、自己へのかかわり方、特にその中でも自己の特性に関してかかわり方が変化していくと考えれば、自己受容性の増大にともなうパーソナリティ変容も比較的生じやすいと言えるのではないか。

また、自己・自己概念は静止・固定的なものではなく、むしろ、流動的な過程であると考えられている (Rogers, C. R., 1959)。しかし、ここで得られた記述内容カテゴリーおよび対象へのかかわり方からは、自己受容性の程度にともなうこの流動性は、自己へのかかわり方、あるいは、評価や態度についてが中心であって、感じられ、気づかれる対象としての自己、あるいは自己の枠組みは比較的安定していると言うことができる。

SASSV の多くの指標において、対象へのかかわり方の出現率で群間に差が確認されたことは、これらに弁別性があることをあらわしている。特に、4群別総合評価法は仮説検証の段階であるが、この4群間の対象へのかかわり方での出現率、特に対象1.自己の特性への態度的評価でのそれに有意水準に達する差が確認された。さらに、それぞれ上位群になるにつれて自己肯定的な記述の出現率が一様に増大し、下位群になるにつれて自己否定的な記述の出現率が一様に増大していく。以上の結果は、この評価法の有効性を支持するものと言うことができよう。

PBQは5指標のうちでただ1つ、記述内容、対象へのかかわり方のいずれとも群間の出現率に差が認められなかった。しかしながら、尺度合計点にこれを組み合わせた9群別総合評価や4群別総合評価で対象へのかかわり方の群間有意差が認められることから、この指標としての有効性は失われていない。これまでにも述べている (板津, 1989, など) ように、PBQは単独の指標としては弁別性に欠けるところがあるが、他の指標と組み合わせることで、その有効性がみいだされるといった特徴がここでもあきらかにされた。

自己受容性の測定法についてはこれまでもいろいろと論議されてきた。そして、これの客観的な測定が困難であるために、自己肯定感情をもってこれにあてるようになった経緯がある。その例として、Rogers (1949) は、受容され

るか否かの程度を問題にするのではなく、受容としてのありのままの特徴の受け入れる態度・構えを中心におくものの、一面で、“自己受容は自分自身に対する肯定的な態度のことである”として自己評価や自己満足と同義に取り扱うような見解をとっている。本研究で得られた結果からは、自己受容的な人は自己肯定的であるとともに自分自身の好まない面も抑制することなく素直に意識化することができることがみいだされた。言い換えれば、自己受容的な人は自分自身にこだわりが少ない人ということになる。そして、自己否定的な記述は自己受容的な人、自己受容的でない人に頻度の差はあっても比較的出現しやすいのに対して、自己肯定的な記述の出現率は、自己否定的記述のそれと比べてあきらかな差がみられる。特にこれは対象1.：自己の特性について顕著である。このような傾向があるがゆえに、自己肯定的感情をもって自己受容性の指標にあてることが成り立つのではないか。また、そうであるならば、逆に、SASSVの自己受容尺度としての妥当性が検証されたということもできよう。

本研究では下位尺度得点を指標としたTST記述内容の検討をおこなわなかった。しかしながら、基調特性値は下位尺度得点から導かれるものであり(資料参照)、B・C・D・E群それぞれの記述内容カテゴリー・対象へのかかわり方での出現率傾向から、おおよその下位尺度得点と自己記述内容との関係も推測できると思われる。

さらに、「何を書いていいのかわからない(記述のきっかけがつかめない)」、または、テストへの批判的記述、あるいは、20センテンス目に「ここまでうめることができてほっとしている。」というような記述がみられた。これらは、TSTの心理負荷に対する正直な感情であり、それが負荷耐性力の強弱として他の記述内容にも反映されているものと思われる。TSTは記述のきっかけがないところが特徴でもあり、被験者にとって困難な作業にもなる。今回得られた結果は、自己受容的な人、そうでない人の心理的負荷があたえられた状況下での自己態度・自己概念をあらわしている。本研究では、そのようなTSTの長所がみられた反面で、記述内容や記述対象にかなりの偏りも生じていた。そのため、これとは別に、もうすこし構造化した状況の中で自己態度と自己受容

性との関わりを検討することも有益かつ必要かと考える。

## 要 約

本研究では、自己受容性と TST に記述された自己態度との関係について検討した。その結果、自己受容性の 5 指標の下位群間の記述内容カテゴリー出現率に差が認められなかったのに対し、対象へのかかわり方では P B Q をのぞく 4 指標の下位群間に出現率の差が認められた。なお、後者で差が認められたのは、もっぱら対象 1. : 自己の特性に対する態度的評価でのかかわり方によるものであった。

自己・自己概念は静止状態にあるのではなく、流動的な過程であるといわれている。ここで得られた結果からは、この流動的な部分は自己へのかかわり方、あるいは、評価や態度についてであり、感じられ、気づかれる自己の枠組みは比較的安定していると考えられる。

SASSV の 4 群別総合評価法は仮説の段階であるが、この 4 群間の対象へのかかわり方での出現率、特に対象 1. でのそれに差が確認された。さらに、それぞれ上位群になるにつれて自己肯定的な記述の出現率が一様に増大し、下位群になるにつれて自己否定的な記述の出現率が一様に増大する。このような結果は、この評価法の有効性を支持するものと言えよう。

## 引用・参考文献

- Bugental, J. F. T. & Zelen, S. L., 1950 Investigation into the 'self-concept'  
I. The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, 18, 483-498.
- Combs, A. W. & Snygg, D., 1949 *Individual behavior*. New York : Harper.
- Crowne, D. P., & Stephenson, M. W., 1961 Self-acceptance and self-evaluative behavior : An critique of methodology. *Journal of Psychology*, 51, 101-112.
- Fragar, R. & Fadiman, J., 1984 *Personality and personal growth*. 2nd. ed., New York : Haper and Row. (吉福伸逸監訳 自己成長の基礎知識 2 -身体

・意識・行動・人間性の心理学 - 春秋社)

古沢厚子・星野命 1962 自己記述にあらわれた自己態度の安定性。国際基督教大学教育研究, 9, 97-124.

板津裕己 1989. 自己受容尺度短縮版 (SASSV) 作成の試み. 応用心理学研究, 14, 59-65.

岩原信九郎 1957 教育と心理のための推計学 日本文化科学社

Jahoda, M., 1958 Current concept of positive mental health. New York : Basic Books.

国分康孝 1979 心とこころのふれあうとき -カウンセリング技法をこえて- 黎明書房

Kropfer, B., et al., 1954 Development of Rorschach technique. New York : World Book.

Kuhn, M. H. & Mcpartland, T. S., 1954 An empirical investigation of self-attitudes. American Sociological Review, 19, 68-76.

LaFon, F. E., 1954 Behavior on the Rorschach test and a measure of self-acceptance. Psychological Monograph, 68-10 (whole 381), 1-14.

Ohnmacht, F. W. & Muro, J. J., 1967 Self-acceptance : Some anxiety and cognitive style relationship. Journal of Psychology, 67, 235-239.

Pulisuk, M., 1963 Anxiety, self-acceptance, and open-mindedness. Journal of Clinical Psychology, 19, 387-391.

Rogers, C. R., 1949 The attitude and orientation of counselor inclient-centred therapy, Journal of Consulting Psychology, 15, 82-94.

皇 紀夫 1969 キェルケゴールにおける実存の内的構造。京都大学教育学部紀要, 15, 33-41.

高垣忠一郎 1974 TSTにあらわれた反応の心理的負荷について。京都大学教育学部紀要, 20, 207-227.

武田 徹 1985 学生の自我意識と不安(2) -20答法による反応の分析 -日本応用心理学会第52回大会発表論文集, 19.

Turner, R. H., 1976 "The Real Self". *American Journal of Sociology*, 81, 989-1016.

我妻 洋 1964 自我の社会心理 誠信書房

山田ゆかり 1981 青年期における自己概念（I） 日本教育心理学会第23回  
総会発表論文集, 422-423.

Wylie, R. C., 1974 *The self-concept vol. 1. (revised ed.)—A review of  
methodological considerations and measuring instruments—*, Lincoln :  
Univ. of Nebrasuka Press.

柳井 修 1969 自己受容と適応の関係についての研究 八幡大学論集, 20,  
113-118.

## —資料—

## A. 基調特性（上位因子）スコア

基調特性スコアの評価には、特性Ⅰ：自己の行為・行動への受容的態度、特性Ⅱ：自己の行動基盤となる内面的な安定感、それぞれの因子スコア  $z$  値を用いる。SASSV では、特性Ⅰ、特性Ⅱの  $z$  値もとに、

A群：特性Ⅰ  $0.1 \leq z_1$ ，特性Ⅱ  $0.0 \leq z_2$ ，

B群：特性Ⅰ  $z_1 < 0.0$ ，特性Ⅱ  $0.0 \leq z_2$ ，

C群：特性Ⅰ  $z_1 < 0.0$ ，特性Ⅱ  $z_2 < 0.0$ ，

D群：特性Ⅰ  $0.0 \leq z_1$ ，特性Ⅱ  $z_2 < 0.0$

E群：特性Ⅰ  $-0.5 \leq z_1 \leq 0.5$ ，特性Ⅱ  $-0.5 \leq z_2 \leq 0.5$

の5群に分類している（E群は他の4群に優先する）。

特性Ⅰの  $z$  値は、因子Ⅰ・因子Ⅱ・因子Ⅴの得点が高くなると+になる。また、特性Ⅱの  $z$  値は、因子Ⅲ・因子Ⅳ・因子Ⅴでの得点が高くなると+になる。A・B・C・D・E群の位置関係は Fig.1 のように図示される。

なお、SASSV 構成因子は以下の通り。

因子Ⅰ：生き方

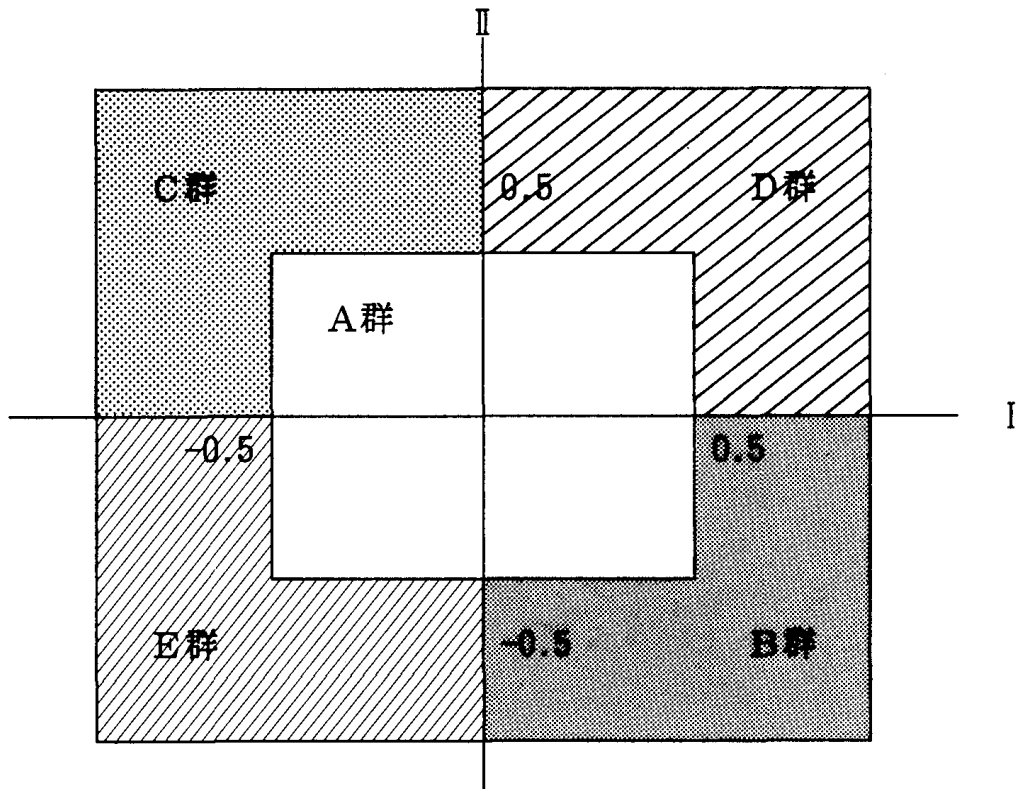
因子Ⅱ：他者との関わり方

因子Ⅲ：情緒不安定でないこと

因子Ⅳ：自信・自己信頼に欠けていないこと

因子Ⅴ：自分自身への満足感





特性 I : 自己の行為・行動への受容的態度  
 特性 II : 自己の行動基盤となる内面的な安定感

Fig.1 基調特性スコア評価モデル

B. その他の指標

尺度合計点, PB 値, 9 群別総合評価および 4 群別総合評価は Fig.2 のように分類される。

|             | 1 (低得点群) | 2 (中位群) | 3 (高得点群) |
|-------------|----------|---------|----------|
| 1 (アンバランス群) | Ⅳ(9)     | Ⅲ(6)    | Ⅰ(3)     |
| 2 (中位群)     | Ⅳ(8)     | Ⅲ(5)    | Ⅰ(2)     |
| 3 (バランス群)   | Ⅳ(7)     | Ⅲ(4)    | Ⅰ(1)     |

(1)~(9) : 9 群別評価, I ~ IV : 4 群別評価

Fig.2 自己受容総合評価モデル